
「遥香」

wa-ya

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「遥香」

【Nコード】

N6643E

【作者名】

w a - y a

【あらすじ】

自分が本当に体験したことです。だから小説といえるかは分かりません。書いていけば少しでも楽になれると思って。正直最後までかけるか不安ではありますが。

「出会い」（前書き）

出逢って1ヶ月。

付き合ってたったの1週間。

それでも本当に好きだった。

最後の人にするとお互いに約束した。

はずだった・・・。

「出会い」

「出会い」

俺の名前はシンヤ。歳は26歳。仕事は調理師。

とある店で毎日キッチンに立って働いている。

彼女はいなかった。というか別れてまだ間もなかったが・・・。

仕事などで忙しくてあまり構ってあげなかったのとお互いのずれが原因で別れた。

今は正直に彼女が欲しいと思っている。

毎日冗談交じりに「なんかいい出会いはないかなあ・・・」と皆の前で愚痴っていた。

皆は決まって「モテると思うけどねえ」と言ってくれてはいた。

自分で言うのは恥ずかしいけど見た目はつきり言って26歳には見られない。

少し童顔ではあるが結構若作りしている。

モテたいためではあるけど・・・。

実際見た目だけで言えば普通よりはイケてるほうだと思う。

背が低いくらいか・・・。

5月の下旬にさしかかるころ、出勤した時に同僚から「今日から新しい女の子が入るよ」と言われた。

俺は相変わらずな感じで「可愛いかなあ」「どんな子だろうな」と少しチャラついていた。

オーナーに連れられてその新人はキッチンのほうに入ってきた。

「今日から入る子だから」

そう言われて顔を見た。と言いかチラツと見た。

もともと目が凄く悪くてあまり人の顔もはっきりとは見えていなかった。

それと基本的に挨拶されるまではこちらは何もしないという料理人としての職人気質なのかは分からないが
変なプライドが邪魔して軽く冷たい態度をとっていた。

が、「この人シンヤだから」とオーナーの一言で俺のほうから挨拶が必要になってしまった・・・。

「はじめまして、よろしくね」

そうつって目を合わせた。

彼女は挨拶っぽいことをしゃべっていた。声が小さくてあまり良く聞こえなかった。

と言うか挨拶なんてどうでも良かった。

完璧に一目惚れした。

少しあどけなくて幼さが残っていてヤンキーっぽい感じだけど大人しめの雰囲気。

俺の理想のど真ん中の子だった。

あまりにも焦って目をそらした。

でもやっぱり気になってもう一度目を合わせた。

たまたまその瞬間にはその場所に俺とその子だけになっていた。わずか数秒の間だが。

彼女も俺をじっと見ていた。

その瞬間に根拠はないけど

「この人とは必ず何かがある」

期待でも悲観的な感じでもなく直感的にそう思った。

仕事に戻った時名前を聞くのを忘れていたことに気づいた。

「あの子の名前なんだっけ？」

「たしかハル力ですよ」

（ハルカ）

すぐに皆の前で「ハルカには絶対誰も手出さなよ!!」

どうつもりで俺が言っただけ皆すぐに分かった様子で「はい」

凄く胸の奥のほうで熱くなっていたのが分かっていった。

確実に一目惚れだ。

「出会い」（後書き）

毎日苦しんでいます。

この先どうして行けばいいのかわかりません。

ただこの話は最後まで書いて行きたいと思っています。書き終わったとき自分は何を思うんだろうか・・・。

「小さな幸せ」

「小さな幸せ」

会った初日ハルカは、初めての日と言うこともあって店の接客に関する事などを覚えるのでパタパタと

動き回っていたのであまり目にもすることもなく時間が過ぎていた。

ハルカがようやく上がる時間になり賄いを作ってあげることになった。

毎日ちゃんとうまいと思えるものを作っているつもりだったがこの日は自然と力が入った。

この日作った賄いは豚肉を使ったポトフだった。

シンプルな味付けは俺の得意分野だったからかなり自信があった。

食べている間俺は他の仕事があつたので話しかけることもできずにいたが気になって様子をチラッと見ていた。

隅っこのほうで少し小さくなっておとなしく食べていた。

なんだか淒く愛しく見えた。

が、仕事をしているうちに食べ終わってしまい帰ろうと着替えに行っていた。

この時俺は焦ったように何か話しかけなくちゃいけないと思い発注

の確認を装って店の外の冷蔵庫へと急いだ。

タイミングよくハルカは着替え終わって携帯を片手に帰りだそうと
していた。

俺は「今から彼氏とデートなのか？」とよくある感じで軽い探りを
入れてみた。

ハルカ「彼氏は最近うまくいってなくてもうやばいです」

「嫌いになったの？」

ハルカ「遠距離だから逢えないし」

「そうなんだあ。ちなみにどうゆう男が好きなの？」

ハルカ「ヤンキーっぽい人で少し強引な人です」

「やっぱりなあ。だと思った。」

こんな感じで軽く話して俺は何気ない感じで仕事に戻った。

この時はただ話ができたことに満足していた。

何か変な達成感を覚えていた。

凄く好きな声だった。

大きい声ではなくハキハキしている方でもないが俺にとってはいつ
まで話していても飽きない声だった。

次の日職場に行った途端に同僚から「今日もあの娘来ますよ」と告げられた。

「ふーん、そうなんだ」そっけなく答えた。

本当は聞いた途端にニヤケてしまいそうだったがばれない様にしていた。

「おはようございます」か細い声でハルカが入ってきた。

「ウィーっす」

軽く挨拶をして顔を合わせた。

相変わらず可愛かった。

多分俺はこの時すでに馬鹿になっていたんだと思う。

この日は仕事中也軽い話などはしていたがほんの数秒程度だった。

しかも賄いを食べずに帰ろうとしていた。

又慌てて外の冷蔵庫にダッシュした。

又タイミングよく帰る寸前だった。

この時何を話したかは全く覚えていない。

だが昨日よりは長い時間話していたことだけは覚えている。

帰り際に軽く手を振って「じゃあねえ」といって店に戻る時にハルカは少し照れたように笑顔で小さくペコツとしていた。

その瞬間から俺は決めた。

（ハルカとずっと一緒にいたい。どうにかして俺の女にしよう）

一目惚れというものがこんなにも自分を突き動かすものだとは知らなかった。

ただこの時から頭の中はハルカのことではいっぱいだった。

「失踪」

「失踪」

次の日もハルカはバイトに入っていた。

はずだった。

シフトは6時入りだったのに×印がついていた。

がっかりしたが又来週のシフトが組まれていたので何とかホッとしていた。

きつと何か用事があるんだろう・・・。

軽く考えていた。

ちょうど6月1日は店の客を交えてのバーベキューが予定されていた。

俺は用事を理由に欠席を伝えていた。

本当はただ人数が多いのが嫌いなだけだったのだが・・・。

ハルカも誘われていて参加の意思を伝えていたらしい。

それでも俺は行きたくない理由があった。それは後に説明しよう。

5月の最終日になった。

オーナーからショックなことを告げられた。

「ハルカと連絡が取れないんだよね。」

瞬間的に察知した。

（ばっくれだ）

事実、この店は女のバックレが激しい。

理由はオーナーのセクハラまがいな行動だ。

ハルカも実際にそれっぽいことはされていたのは俺の目から見ても分かった。

（やっぱりなあ）

俺は思った。

凄くショックだった。

もう逢えないんだ。

せっかく本気で惚れた女だったのに……。

しかしこの後の出来事がこの物語の全てを変えた。

厨房にチエという女がいた。

そのチエもオーナーからアドレスを教えてもらい心配してメールしていた。

「バーベキュー来ないの？」

そんな感じのメールだったらしい。

しかしバーベキュー当日もメールは来なかった。

バーベキューの次の日、出席しなかった俺はチエに「ハル力は来たの？」とたずねた。

結局なんの音沙汰もなしだったらしい。

俺はこの時何を思ったのかはあまりはつきり覚えていないがチエからハル力のアドレスを聞き出してメールした。

6 / 2 22 : 32

タイトル 今晚は。

本文

店のキッチンのしんやだよ。分かるか？

かつてにメールしてごめんな。心配になったから聞きたいんだけど、やめちゃったか？

家の店って女の子がすぐにやめちゃううんだよね。

原因はオーナーらしいんだけどね。もしかしたらはるかちゃんもオーナーが原因か？

それともほかに何かあった？

俺は誰にも言わないから教えてくれないかな？

こうメールした。

返事が返ってくることはあまり期待していなかった。

・・・。

案の定返事は返ってこなかった。

次の日に思い切ってこうメールした。

6 / 3 19 : 01

タイトル 実は

本文

本当の事言つと店の事とかバイトの事はどうでもいいんだよね。心配してたのは本当だけど。

初めて逢った時から結構気になってさ。

すごいタイプなんだよね。もし嫌じゃなかったらまたメールしてもいいか？

もちろん誰にも言わないし。

もしよかったらメール頂戴。

「奇跡・・・そして再び」

「奇跡・・・そして再び・・・」

ハルカにメールを送ってから俺は凄く不安な気持ちでいた。

突然告白みたいなメールを送ったところで返事が来るわけもないし
大抵の人なら
引いてしまうつんじゃないか・・・。

でも自分の伝えたいことは伝えたから良しとしよう。

開き直っていた。

少しの間オーダーが入って厨房内は慌しくなっていた。

俺はメールのことなど忘れて料理に集中していた。

9時過ぎくらいにいったん落ち着いて何気なく携帯を開いてみた。

メール受信のマークがあった。

何も考えずにメールを開いた。

一瞬時が止まった・・・。

ハルカからのメールだった。

6 / 3 2 1 : 2 2

タイトル Re :

本文

遅れてすいません

バイトばつくれみたいになって迷惑かけてほんとごめんなさい
遥香キャバもやっててちゃんとしたバイトしようと思ってただけ
ど結局だめになっちゃって

あ、メールとかなら全然大丈夫です

メールが来た!!!

凄くびつくりした。

皆に危なくしゃべってしまふところだった。

もちろん言える訳がなかった。

バックレた女とメールをするだなんてあまり好ましいことではない。

すぐに返事をした。

少しニヤケながら。

6 / 3 21:24

タイトル Re2 :

本文

そうなんだあ。連絡来てよかったよ。今日もキャバなの？
ってかどこの店？

すぐに返事が来た。

6 / 3 2 1 : 2 7

タイトル Re : Re 2 :

本文

はい

今日は休みです

セレクトって店ですね

俺もすぐにメールを返した。

6 / 3 2 1 : 3 2

タイトル Re 2 : Re 2 :

本文

雑誌にのってるよね。うちの店ものってるけどね。
週何回入ってるの？ってか学校は大丈夫なの？

もうメールだとしても繋がりを持っていれる事が凄く嬉しかった。

なんでも気持ちは正直に伝えてみるものだな。

素直にそう思った。

またすぐに返事が来た。

6 / 3 2 1 : 3 9

タイトル Re:Re2:Re2:
本文

載ってますねー

いまわ週2か3くらいですね
学校大丈夫ですよ

まだ俺はメールを続けた

6 / 3 2 1 : 4 0

タイトル Re2:Re2:Re2:

本文

彼氏とは本当にもう終わりそうなの？

少し核心に迫った感じのメールをしてみた。

返事が来た。

6 / 3 2 1 : 4 2

タイトル Re:Re2:Re2:Re2:

本文

ですね

はるか基本遠恋むりなんで

心の中でよしっと思って調子に乗ってしまい変なメールをしてしま
った。

6 / 3 2 1 : 4 4

タイトル Re2:Re2:Re2:Re2:
本文

タイプは？見た目とかはどんなのが好きなの？

返事が来た。

6/3 21:55
タイトル 無題

本文

強引ってかSな人とかですかね わら
見た目わあんま気にしないです

思い切ったメールを試してみた。

6/3 21:58
タイトル Re:

本文

そうなんだあ。俺ははるかちゃんのこと凄いタイプなんだけどね。
俺は雰囲気的にあり？

今までのペースで返事が帰ってこなくなった。

あせって訂正じみたメールを送った。

6/3 22:29
タイトル Re:

本文

変なメールしちゃったか？
気にしないでいいよ。
でも、またバイトは探すのか？

少したってからメールが来た。

6 / 3 2 3 : 0 7

タイトル R e : R e :

本文

遅れてすいません

や、全然ありだと思えますよー
いまわとりあえずキャバだけでもです

この日はここでメールは終わった。

凄くあっという間に時間が過ぎていた。

頭の中は遥香のことといっぱいになっていた。

こんな風にメールができるとは思っていなかったから今俺は奇跡が
起きているんだろうなあと思った。

次の日俺は何気ないメールをした。

6 / 4 1 5 : 5 1

タイトル 無題

本文

今日はなかなか暑い日だな。

どっか遊び行きたいけど仕事・・・。

はあ。しかも店が地下だし。脱走すっかな。

全然話変わるんだけど店での源氏名は何て言うの？

また今日もメールできるんだろうと思っていた。

しかし店がこの日は忙しかった。

気がついたら１１時過ぎくらいになっていた。

疲れて放心状態のまま携帯を開いてみた。

遥香からの返事はなかった。

この日はすぐに寝てしまった。

次の日もめげずにメールした。

6 / 5 1 6 : 5 3

タイトル R e 2 : R e 2 :

本文

昨日は忙しかったのか？

メールしたんだけど。

まあ、いいや。

それより１５日の日曜日の夜空いてる？

飯食べつつ飲み行かない？

逢いたいからさ。

この日も返事は返ってこなかった。

俺は自分が送ったメールの履歴を何度も読み返していた。

嫌われてしまったのだろうか。

不安に駆られていたがあまりしつこくメールするのはよくないから、返事が帰ってくるまで待とうと思っていた。

誘った15日になっても返事は来なかった。

自分の何がいけなかったのかはよく分からなかった。

あまりにも誘うのが早すぎたのか。

事実、俺は駆け引きとかが苦手だ。

好きだと思ったらすぐに気持ちを伝えなくなるしはつきりさせなくなる性格だ。

だから今回も遥香に対して直球勝負に出たつもりだった。

結果は音信不通に近い感じ……。

「余韻」

「余韻」

最後にメールをしてからしばらくの間遥香からの連絡はなかった。

どうしようもできなかった。

ただ待つことしか・・・。

だんだん過去の人になるのかな。

そのくらいの気持ちでいよう。

自分の中でかなり冷静に考えるようにしていた。

本当はやりきれない思いが多少あったが・・・。

6月の後半に差し掛かって日差しが強くなり夏が本格的に始まるう
としていた。

昼ごろに何気なく携帯をいじっていたら誰かからメールが来た。

遥香だった。

6 / 2 3 1 2 : 5 2

タイトル 無題

本文

すいません超遅れて

携帯止まってきましたあ

またまたビックリした。

俺はすぐに返事を送った。

6 / 2 3 1 2 : 5 4

タイトル R e :

本文

あらあ、久し振りい
嫌われてたかと思ってたあ
今は学校？

1時間くらい返事が返ってこなかった。

もう連絡があまり取れなくなるのは嫌だ。

そう思っでこうメールした。

6 / 2 3 1 3 : 5 4

タイトル R e :

本文

っていうか俺メールより電話のほうがいんだけど。
番号教えて

しばらくして返事が来た。

6 / 2 3 1 5 : 3 1

タイトル R e : R e :

本文

0 9 0 * 6 * 4 * 2 * 5 です

俺はその時間はちょうど店の厨房でチエと二人だけでいた。

すぐに電話をかけた。

か細い声で「もしもし」と遥香の声が聞こえた。

後ろでバスの音が聞こえていたので

「今学校の帰りか？」

遥香「はい」

「あーそうなんだあ。夜中の1時過ぎって起きてる？」

遥香「多分起きてると思います」

「じゃあ起きてて！！電話すつから」

遥香「わかりましたあ」

そっいつて電話を切った。

俺は凄い興奮していた。

思わずチエに「今の誰だと思っ？」

こうたずねた。

チエは素直にわからないと答えた。

すぐに「絶対誰にも言つなよ。遥香だよ」

チエ「えーっ！っ！！本当に？すごい！」

「今日の夜電話する約束した！！もう俺が遥香のこと気に入ってることは

遥香知ってるから今日思いを全部言ってみる！！！」

チエ「行つた方がいいですよ！」

「じゃあもうまくいったらお前に焼肉おごってやるよ。」

チエ「やったああ！」

馬鹿みたいな会話で盛り上がっていた。

この日は早く時間が過ぎるとばかり思っていた。

無理やり時計を進めてしまおうとまで思っていた。

またあの声が聞ける。

全部思いを伝えてもしだめでも後悔はしないつもりだった。

意外と時間は過ぎてくれなかった・・・。

しかし俺の顔はニコニコしていたらしい。

ようやく閉店の時間となった。

おれはダッシュで着替えて凄い勢いでチャリをこいだ。

この時俺の恋のパワーは相当なものだっただろう……。

早くあの声が聞きたい……。

ただその思いで……。

「余韻」(後書き)

後7話位で内容がガラッと変わります。
今はまだよくある感じだけど・・・。
ちゃんとかけるかなあ・・・。

「最高の時」

「最高の時」

家に着いた。

すぐに電話をかけた。

コールが鳴った。

少し緊張した。

しかしすぐには出なかった。

寝たか？と思いもう一度電話をかけてみた。

何回かコールがなったが出そうになかった。

今日はもう電話しないほうがいいかな・・・と思って切ろうとした時

「もしもし」

相変わらずの小さくてか細い声で遥香の声がした。

「あらっ？寝てたか？」

遥香「ちよつと寝てましたあ」

「電話できんの？切ったほうが良い？」

遥香「大丈夫です」

何気ない話から会話が始まった。

もう俺はあまりにも嬉しすぎて一ヶ所に落ち着いていられなかった。
ソファーに横たわったりタバコを吸いながら部屋中をパタパタと歩き回ったり……。

会話の流れで

「お前モテるだろ？」

遥香「えー！全然モテませんよぉ。」

「いや、だとしても俺にはモテてるぞ！！！！ってか俺もモテてえ。」

遥香「絶対モテそう……。」

「お前にモテれば十分だけど」

遥香「モテモテですよ」

！！！！

「ん？今の本当？」

遥香「はい」

「え、じゃあお前も俺に一目ぼれしたの？」

遥香「はじめて見たときから格好いいと思ってましたよ。」

「ああ一目惚れとは違うんだあ。まあいいか。じゃあ俺と付き合いおうよ」

遥香「一回逢ってからでも良いですか？」

「うん。別に構わないよ」

こんな感じで話をしていたが冷静で居れるはずがなかった。

「じゃあ明日仕事前に時間がちよつと空いてるから逢おう！」

遥香「分かりました。」

「じゃあ明日。遥香あ。」

遥香「はい・・・？」

「好きだぞ！」

遥香「はい・・・。」

「遥香は？」

遥香「えー！！恥ずかしい・・・。」

「まず言ってみ」

遥香「遥香も好きですよ」

「ありがとう。じゃあオヤスミ・・・」

遥香「おやすみなさい・・・」

電話を切った時俺はガッツポーズをしたような気がする。

凄く興奮していた。

2時間くらいの長電話だったが俺には時間の流れは感じなかった。

明日に備えて今日はもう寝よう。

そう思っていたときチエからメールが来た

6 / 2 4 3 : 4 9

タイトル 無題

本文

ハルカちゃんと電話しましたか!?
付き合った?

すぐにチエに電話をかけた。

「すげーぞ!とりあえず明日逢う!!」

チエ「気持ちちは伝えたの?」

「全部伝えた。」

チエ「それで逢えるんだから大丈夫だよ!!」

「だと良いけどねー」

チエ「ってかシンヤさん声のテンションが全く違うし!」

「そうか?」

本当は自分でも分かっていた。

一目惚れでこんなにもうまくいくとは・・・。

似合わないが「夢のよう」だ。

ただ明日逢って嫌われないようにしなくては・・・。

色んなことを考えていたらいつの間にか寝てしまっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6643e/>

「遥香」

2010年10月8日23時53分発行